

# 人間本性の特質

言語研究の立場からの、新しいモ  
ラロジー人間学構想のためのメモ

黒川 洋

- 0) はじめに — 言語・文化についても同じことがいえる
- 1) 中核においてハードでありながら、  
表層におけるソフトなシステムとしての特質
- 2) 肉体的には限定された存在でありながら、この世にあらゆる可能性を創造する可能性をもった存在としての特質
- 3) 有限の存在でありながら、無限のものを求める価値志向的存在としての特質
- 4) 社会構成のサブシステムでありながら、社会を内面化し、さらに自己を創造する主体的存在としての特質
- 5) 自らの創り出した文化によって、逆に創られていく存在としての特質 — 人間教育の可能性
- 6) 認識において完全をめざしながら、実際には不完全な認識しかできない存在としての特質 — 実在の認識は、実在と人間の合作の結果である
- 7) むすび — さまざまな矛盾の動的ななかたまりともいえるべき存在としての特質
- 8) 参考文献



察を進めるに至っていないことをしめています。

- ④ [図1]の斜線の部分の円形は上下左右にある程度まで移動し得ることを意図しています。これは所与の条件が一定であっても、人間の主体的努力、「自己創造的自己」の力如何によっては、環境の選択と創造が行なわれ得るというダイナミックな可能性をしめています。
- ⑤ 中核に生物的（遺伝的）なものを、周辺に社会的・文化的ものをすえた意味は、中核ほど安定していて動きにくい「閉ざされたシステム」としての性格を基本的にもっていること、周辺つまり表層ほどその反対の色彩の性格をもっていることをしめています。つまり「梅干型」の二重構造をもっていることをしめています。その特性をしめすキーワード群については、[図2]にかかげました。

(2) 言語は何故変化するか——言語の本質と人間本性構造のモデルとの対比

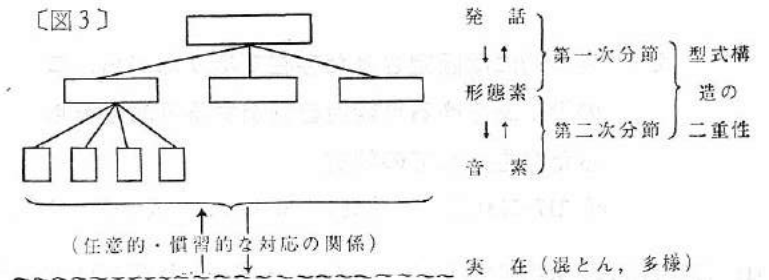
- ① 言語の本質的特性——以下のすべてを具備していること
- a. 恣意性 (Arbitrariness)……表わすものと表わされるものとの間の関係の任意的・慣習的・非必然的なこと、および、任意的・慣習的な有限の単位（分節的単位）を設定すること
- b. 転移性 (Displacement)……時間的・空間的に遠く離れたことについて述べ得ること
- c. 型式構造の二重性 (Duality of patterning)<sup>(注2)</sup>……発話は形態素の組合せより成り（第一次分節）、形態素は音素の組合せより成って（第二次分節）二重の階層構造をなしていること——この特性により、有限の単位およびその組合せ規則から殆ど無限ともいべき数の表現が可能となる（これが言語と動物のコミュニケーションとの決定的相違点であります）。「二重の体系性」ともいえる。
- d. 創造性 (Productivity)……新しい発話を理解したり、創造することができること——これは恣意性および型式構造の二重性の結果当然でてくる特性の一つともいえます。

- e. 冗長度 (Redundancy)……ゆとりともいべき特性——恣意性および型式構造の二重性の結果、ほとんど無限ともいべき数の表現が可能となるわけですが、実際にはその可能性の極少しか使われておらず、残る可能性は殆ど無限に近く残されており、これが「ゆとり」を形成しているのです。cf. 創造性

このことから、中核（深層構造、型式構造の二重性の存在それ自体など）においてハードでありながら、表層（具体的な発話）においてソフトでゆれ動くシステムとしての言語の本質的特性、言語変化の本質的理由が理解できます。

- f. 伝承性 (Traditionality)……学習による経験が社会集団として承認された行動体系となって、つまり文化情報となって、世代から世代へと伝承されること

(注2) 型式構造の二重性



有限の数の「音素」の組み合わせによりほとんど無限の数の「形態素」が形成され得、さらにまた有限の数の「形態素」しか使わない場合であっても、無限の数の発話を生成することが可能となります。——これは、「音素」や「形態素」が実在と必然的な対応の関係をもっていないこと（恣意性・慣習性）と、二段がまえによる「組み合わせの論理」の結果であります。つまり、有限の単位の組み合わせによる無限性の獲得と、必然の世界からの解放による創造と自由の可能性をもった世界への飛躍を意味しています。これは、人間の哲学的研究・科学的研究における重大な意味をはらんでいるものと考えます。

② 言語の構造・機能・特質と人間の心の構造・機能・特質との密接な関係

言語の発達・獲得と大脳形成との間の密接な関係をしめす生物学的言語学 (Bio-linguistics) ・発達心理学等の実証的研究成果、および、言語と思考の密接な関係をしめす実験心理学・心理学的言語学 (Psycho-linguistics) ・文化人類学・哲学等の理論的・実証的研究成果からみて、言語と人間の心との間には予想以上の密接な関係があるであろうと考えられます。

この意味から、言語の構造およびその本質的特性を探究し考察することは、人間本性の構造のモデルを考えるに当って不可欠であるといっても過言ではないと思います。

- (例)
- 考える
    - 直観的に、イメージによって
    - 言語によって
    - 言語以外のシンボル (例えば数字) によって

2) 肉体的には限定された存在でありながら、この世にあらゆる可能性を創造する可能性をもった存在としての特質

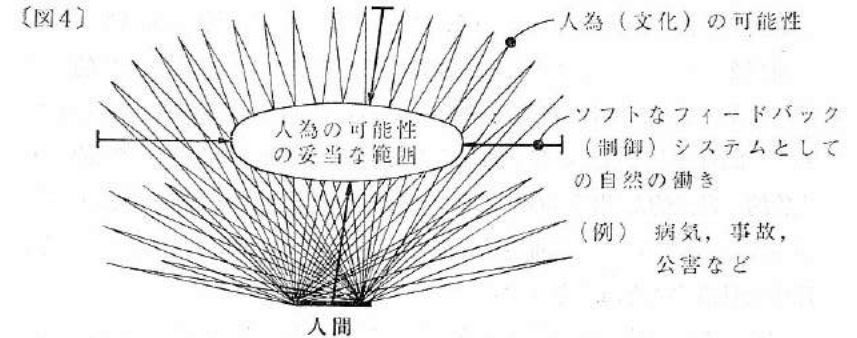
cf. 217-218頁および前頁1)(2)①の、型式構造の二重性

- (1) 高等動物ほど大脳連合野が発達している事実は、大脳連合野におけるニューロンの組み合わせ (配線) の可能性の殆ど無限に近いことを示唆しています。→高等動物になればなるほど、精神的・シンボリック・言語的・文化的なもののウェイトが飛躍的に増大することを意味します。(本能の代行者としての文化)<sup>(注3)</sup>

(注3) 本能の代行者として文化をとらえる根拠となる諸事実→同一種でありながら、群れによる食性その他の習性 (文化的行動) の伝統差や個体差 (Variation) をしめす動物社会の事実……①白山のサル (12群) の中にみられる対照的食性——カムリの群れ (カキ、クリを食べない)、タイコの群れ

- (カキ、クリ大好物) ②いわゆるカラスの方言——H. FRINGS 教授の発見 ③隔離飼育によるサルの、性行動・養育行動の異常——H. F. HARLOW 教授の実験研究 ④コクマルガラスの刷りこみ行動 (Imprinting behavior) ——K. LORENZ 教授の発見など。

(2) 人間と自然の関係——人為に対するフィードバック機能としての自然の働き



シンボルの働きによって思考や意欲はいちじるしく拡大されます。また、行動もいちじるしく拡大されようとします。しかし、実現可能なことと単なる想像の世界でしか起りえないことの区別がいまいなため、また実現可能な場合であってもその条件が不明なため、非常な無理と試行錯誤を重ねて、だんだんと妥当な範囲に人為的なもの (人間の文化、行動) は落つかざるを得なくなると考えられます。このフィードバック (制御) の働きは、具体的には、人間の病気、事故、死、公害などさまざまな形をとって、私たちの自然的、生物的、身体的な側面から精神的、文化的、人為的な側面への作用を及ぼしてくるものと考えられます。人為と自然との関係をそのようなものとしてマクロ的にとらえてみるができます。cf. 次頁3)(2)

3) 有限の存在でありながら、無限のものを求める価値志向的存在としての特質

- (1) 恣意性 (Arbitrariness)、転移性 (Displacement)、型式構造の二重

性、創造性という言語の本質的な側面から、ここにのべる特質が何故に人間特有のものであるかが理解できます。 cf. 214—215頁1)(2)

有限の単位(範疇化) } → 実在との任意 → シンボル性の獲得  
 単位の組み合わせ(構造化) } → 的対応関係  
 ↓  
 感覚を超えた存在・法則性の認知 ← 予測の可能化 ← 感覚からの解放

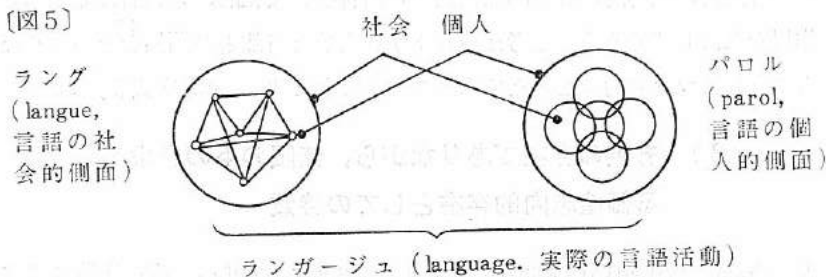
(2) 身体的(感覚的)・生物的・自然的な動因と、精神的(超感覚的)・文化的・人為的な動因との葛藤 cf.. フィードバックの働き 前頁2)(2)

前頁2)(2)でのべたように、精神的(超感覚的)・文化的・人為的な側面の無限のひろがりに対して、フィードバック(制御)の働きを通して妥当な限定を与えてくる基本的なものとして、人間の身体的(感覚的)・生物的・自然的な側面があります。この際、両者の間の矛盾・分裂・葛藤がさげられず、ここに人間が目的をもち「苦悩を超えて成長する」本質的理由を見出すことができます。

言語が人間の感覚的世界と超感覚的世界の接点に位し、その両者にまたがっていることは、人間存在の秘密の解明に言語が重大な鍵となっていることを示唆しています。

4) 社会構成のサブシステムでありながら、社会を内面化し、さらに自己を創造する主体的存在としての特質——言語・文化についても同じことがいえる

[図5]



社会と個人は、互いに他を予想し他を前提としてはじめて成立し得るものであります。概念の世界、論理の世界でこそ、一応社会と個人とは互いに対立させて考えることは可能であります。しかし、このような「社会か個人か」という二値的な、観念的な発想こそ、現代思想を対立・抗争におとしめている原因の一つであると考えます。現実には、社会性と個人性の統合体ともいうべき渾然一体の姿で動いていくのが本来の姿であろうと考えます。この最も典型的な姿が、言語のパロール、ラング、ランゲージュの関係において見られます。文化についても、方法論的には同じことがいえるものと考えます。

5) 自らの創り出した文化によって、逆に創られていく存在としての特質——人間教育の可能性

(1) 本能、経験、文化——動物の生活行動の情報源

本能………遺伝される行動  
 (遺伝情報)  
 経験………個人的学習行動  
 (学習情報)  
 文化………社会集団として承  
 認された行動体系  
 (文化情報)<sup>(注4)</sup> } 習得される行動  
 (最広義の文化)

(注4) 習得された行動と行動の諸結果の総合体であり、その構成要素が或一つの社会の成員によって分有・伝達されているもの。(R. LINTON)

(2) 文化の人間形成力と人間の文化形成力……文化の人間形成力は、狼に育てられたインドの少女、アマラとカマラの例において、劇的にしめされています。普通の場合、我々は文化の中で生まれ、その基礎をすべて身につけた上で、成長に従ってさらにそれを選択的に習得する方向に向うのであります。さらにまた、それらの基盤に立って創造的行為が営まれ、新しい



文化がプラスアルファという形で、あるいはかなり基本的なものからやり直すという形で生み出されます。しかし、いづれにせよ、文化の人間形成力と人間の文化形成力とは、言語シンボルを中心とするシンボルを媒介としてダイナミックな相補的關係にあるものとしてとらえることができます。元来、制度（規則）と自由の關係も、同じような相補的關係にあるものこそ健全な姿ではないかと考えます。

- (3) 人間の本質的特性としての教育行動……ニホンザルの研究によれば、ニホンザルにおいては模倣とか、食べてはいけないものを食べるのを見つけた時の処罰行動はあっても、積極的に経験の結果を教えようとする教育行動は観察されていないことは、上記(2)とにらみ合わせる時、注目すべき事実であると考えます。

## 6) 認識において完全をめざしながら、実際には不完全な認識しかできない存在としての特質—— 實在の認識は、實在と人間の合作の結果である

「言語は實在認識の過程において強制的な通路づけの決定的な働らきをする。従って言語的背景が異なれば、世界観も異なる。」というSAPIR-WHORFの言語相対説ほど注目をあび、学際的な広範囲の論争をまき起こした言語学的・人類学的知見は少ない。

賛否いづれの立場からも実証的研究が続出しているが、決着がついていない。これについては、つぎのように考えるのが最も妥当ではないかと考えます。

實在を鏡のようにありのまま認識できるとする素朴的實在論は、實在を単なる我々の觀念の投影にすぎないとする觀念論的な立場と共に崩壊した。眞実はまさにその中間にある。つまり、我々が實在を認識することのできるのは、一種のフィルター——生理的・心理的・言語的・社会的・文化的なフィルター——を通してのみ成立する。その際、言語は、知覚を超えたものの認

識のレベルで大きな働らき（つまり、SAPIR-WHORF 説の如き決定的な働らき）ではなくむしろ、認識の拠点あるいは構図形成・誘導の働らきをするものと考えられる。(例えば、時間の概念) 逆に、具体的な知覚の世界では、言語的な力のしめるウエイトは弱まり即物的となり、言語は認識過程にそれほど重大な影響を及ぼすとは考えにくい。(例えば、「雪」という語がない言語においても、「雪」を知覚できることに変わりがないように見える。)

従って、我々人間は絶対に實在をありのままに認識できる存在ではなく、永遠に實在の姿のごく一部分をかいま見つける存在であろうかと考えられます。まさに「實在の認識は、實在と人間の合作の結果である」し、ありつづけるに違いないと考えます。

この立場に非常に近い考えに、ベルタランフィの「遠近法の哲学」(Perspectivism)があることを付記いたします。

## 7) むすび——さまざまな矛盾の動態的なかたまりともいべき存在としての特質

- (1) 人間の言語に、そのもっとも典型的な姿がみられます。このことは、人間と他の動物との基本的な相違点が言語（音声シンボルとしての）の有無にあることとともに、言語の研究が人間本性研究の核心に迫るための一つの重要な鍵をなす理由であります。cf. 動物と人間の基本的相違、シンボルの複雑さ、可能性の大きさ
- (2) 現実において我々が矛盾と考えるのは、言語によって物事を概念的に仕分けして考えるためであろうと考えられます。即ち、論理的思考は、言語による二値的思考（例えば、善か悪かの如くに）による場合が極めて多い。——二値的思考の明快さと落とし穴
- (3) モラロジーにおけるさまざまな学問的・方法論的な難点・問題点を克服するための「統合のための方法論」として、つぎのような原理・概念が、有力な可能性をはらんでおり、今後の重要な研究課題であると考えます。

- ① 創造性の科学・変形生成文法論等における「変換性の原理」
- ② 構造言語学・量子物理学等における「相補性の原理」
- ③ 一般システム論における「システム合成の原理」
- ④ 情報科学における「情報の概念」
- ⑤ 「シンボルの理論」、「言語理論」、「文化理論」、その他

## 8) 参考文献

BERTALANFFY, Von L. 1968

General System Theory: Foundation, Development, Applications. New York.  
(長野敬・太田邦昌訳 1973. 一般システム理論——その基礎・発展・応用——。  
みすず書房)

CASSIRER, E. 1944

An Essay on Man—An Introduction to a Philosophy of Human Culture. (宮  
城音弥訳 1953. 人間——この象徴を操るもの——。岩波書店)

CHOMSKY, N. 1966

Cartesian Linguistics: A Chapter in the History of Rationalist Thought. New  
York (川本茂雄訳 1970. デカルト派言語学: 合理主義思想の歴史の一章。  
テック)

DUBOS, R. 1968

So Human an Animal. New York (野島徳吉・遠藤三喜子共訳 1970. 人間  
であるために。紀伊国屋書店)

江原昭善 1971

自己家畜化現象——ヒトはどこまで家畜か——。自然1971年4月号 pp. 72—77

HARLOW, H. F. and HARLOW, M. K. 古浦一郎訳 1972

サル環境への適応、サイエンス (Scientific American 日本版) 別冊 1972年  
8月号 pp. 101—111

HAYAKAWA, S. I. 1964

Language in Thought and Action. Second Edition. New York (大久保忠利  
訳 1965. 思考と行動における言語。第二版。岩波書店)

広池千九郎 (1928) 1968

新科学としてのモラロジーを確立する為の最初の試みとしての道徳科学の論  
文。道徳科学研究所

HOIJOR, H. 1969

The Origin of Language. HILL, A. A. ed. 1969. Linguistics Today. New  
York pp. 50—58 (久保内瑞郎訳 1971. 言語の起源。宮部菊男監訳 1971.  
現代言語学——紹介と展望—— pp. 59—67)

細川幹夫 1971

因果律の原理の研究Ⅱ——科学性の問題について——。道徳科学研究 No. 60  
pp. 77—100

今西錦司 1972

動物の社会。思索社

伊谷純一郎 1971

コミュニケーションの進化。理想No. 456 pp. 85—97

JOLLY, A. 1972

The Evolution of Primate Behavior. New York

河合雅雄 1969

ニホンザルの生態。河出書房新社

河内十郎 1970

生理心理学の立場からみた思考と言語。東洋編 1970. 講座心理学8 思考と  
言語 pp. 37—91

黒川 洋 1972

人間行動と他の動物行動の基本的相違——モラロジーにおける因果律研究の新  
しい視座形成のために——。研究ノート No. 27 pp. 105—108

LENNEBERG, E. H. 1967

Biological Foundation of Language. New York

水野治太郎 1973

モラロジー人間論の特色と欠陥、その克服——社会科学(社会哲学)の観点か  
ら——。研究ノート No. 41 pp. 107—114

宮地伝三郎 1969

動物社会——人間社会への道標。筑摩書房

森岡健二・藤永保 1970

言語と人間。東海大学出版会

中村雄二郎 1973

人間論の新しい地平——なぜ言語を考えるか——。言語 1973- Vo. 1. No. 3  
pp. 10-19

SAUSSURE, De F. 1916

Cours de linguistique générale. Lausanne (小林英夫訳 1940. 言語学原論。  
岩波書店)

吉田民人 1968

情報科学の構想——エヴォルーションニストのウイナー的自然観——。

吉田民人・加藤秀俊・竹内郁郎 1968. 今日の社会心理学4 社会的コミュニケーション pp. 3-287

(補注) 記号の説明

cf.……「を比較参照せよ」